

正確な絵具。



ホルベイン絵具の第一の目的は、専門家の使用に応える、という点にあります。そのため、絵具は正確な道具でなければならないと考えます。いつ買った絵具も、同じ発色でなければならないし、キャンバスに描いたときの伸びの良さも落としてはならない。けれど耐光性や耐水性は向上させなければならない。正確な絵具とは、10年前と一見変わらないように見えて、性能が上がっていること。ホルベイン絵具の命は品質なのです。

●油絵具29号(110ml)チューブ。40色新登場。大きいサイズでも、品質は変わりません。

ホルベイン工業株式会社 東京都品川区東品川2-10-1 TEL.03(2861)9121 大阪府東大阪市上本町1-2-26 TEL.06(2721)1124



Holbein

ホルベイン絵具
www.holbein-works.co.jp

小林孝巨

木漏れ日のむこう側

鷹見明彦 文



1995年のアトリエ。描きかけの《Stray Dog》と《Puppy》が壁に掛けられている。木漏れ日を描くようになってからのモチーフは、水飲み場、犬、犬小屋、家と変遷をたどる。

MOTアニュアル2003「Days—

—おだやかな日々」(東京都現代美術館に近作を展示中の小林孝巨。四年前からタイのバンコクに移住した画家を最近東京にもできたアトリエに訪ねた。新しいアトリエは、隅田川近くの自動車整備工場の一画を改装した場所。下町の通りからほの暗い工場の奥にはいと、午後の光のなかにたおやかな一本の木を描いた大作が現れる。昨年夏の兵庫県立美術館開館記念展に出品されて、もどってきた作品だ。「まだ枝の間のひかりのまわりを描きたい」という。

枝葉の隙間にもれるひかり……。採光窓から射し込む南の光に、イリユージョン全体がほんとうの逆光に包まれている。「ひかりあるところへ」。初作品集(日本経済新聞社のタイトルそのままに、画家は日々の事物を自分と世界を愛でるひかりに誘われて、南国の街に移り住んだ。《Fruit》(一九九二)。十年前にはじめて個展を観に行ったときの大作。



「潜水艦は、必死になって絵を描き続けようとしていた頃の自画像でした」

1992

Fruit パネルに綿布、油彩 250×364cm 撮影＝早川宏一 写真提供＝西村画廊

パネルに綿布を張った厚い画面は、荒々しくナイフで削られている。大鉢から水がこぼれる瞬間に落下する実を捕らえようとする鴉、傍らには、地上で潜望鏡をのぼした潜水艦がいる。「水のない場所にあらわれる潜水艦を描きつづける以外に自分を保ちつづける術は何もなかった」。四浪してはいった愛知芸大の油画科では、一年上に奈良美智、後輩に杉戸洋がいた。皆、ラケヒー部だった。八〇年代初め、美大生に人気があったのは、ホックニーやベーンコン、ホッパリーなどだったが、小林は、クレモニーニという海辺の日常や情景を描くイタリヤの画家に傾倒した。サーフィンが好きで、映画「エンドレス・サマー」に憧れる青年の気質だった。東京へきた画家の卵は、結婚式場やレストランの壁画を描く仕事を続けた。時代は、バブルの盛りで天使や雲のパターンを短時に描ききる作業の反面で、水のない世界で潜水艦となった自画像を描きつづける自分がいた。このころには、ニュー・ペインティングの大波がうち寄せてもきた。ほかの若い作家たちと同様に、シュナーベルやクレメンテ、バゼリッツ、キーファーなどの感化を受けたというが、地下や屋根裏や喫茶店のギャラリーの壁に現れる「潜水艦」の絵に惹きつけられた私の眼には、閉ざされた気圧の中で自己の世界を熟成させていく画家の大きな器量が映った。しばらくすると、潜水艦は消えて、モティーフの組み合わせによる情景から、木、犬、水飲み場などをクローズ・アップして描く構図が変わった。モノクロームに近かった画面全体にひかりの粒が射していた。画家には、ある日に見えた「木漏れ日」との出会いの体験があった。「木漏れ日」次の日も見て、次の日も見た。心を豊かに満たした何かをもういちど感じたいと思った。そして見えないけれど確かに感じたその何かを絵に描きたいと思った。それさえ描ければいいと思った。——光は、現実のものとしてそこにあった」。



200I-2

「人物にはモデルはいません。写実ではなく自分の形にしたいから。今はまだ目をつむっていますが、だんだん弛んでいつかは開いてくるのかもしれない」

Small Death 小さな死 2001-2 キャンバスに油彩 70×70cm 撮影=内田芳孝 写真提供=西村画廊

機は熟していた。文化庁の海外派遣には、何度か旅をしたタイを選び、九九年からは同地に住んだ。南国で制作されて送られてくるようになった絵は、木漏れ日の緑を広げはしたが、エキゾチックな風物を映すものでは必ずしもなかった。食器や寝具、電球や車のテールランプといった身近な事物をじっくりと描いた画面の静謐は、画家がひかりのように欲した日本との「距離」になれる絵を育める日常の時間を伝える。「油彩が好きなのは、色の深みと乾くまでの時間の長さ、それと粘り気が体質に合っているからなんです」。

《Small Death-小さな死》(1001-011)。これまで人物といえは後ろ姿か手足しか描かなかった小林が、最近描きだした顔のシリーズ。男女の寝顔のクローズ・アップだが、特定の肖像というわけではない。眼を閉じて、睡りという「小さな死」の状態に静物と化した人の頭部……それは、画家がキャンバスとい



こばやし・たかのぶ 1960年東京生まれ。86年愛知県立芸術大学美術学部油画科卒業。96年VOCA展奨励賞受賞。文化庁芸術家在外研修員としてタイに1年間滞在。98年アート・スコープ98ガスコーニュ・ジャパニーズ・アート・スカラシップでロット・エ・ガロンヌ(フランス)に3カ月滞在。99年バンコクに移住。金山平三記念美術展(兵庫県立近代美術館)佳作賞受賞。西村画廊ほかで個展多数。今春熊野古道なかへち美術館で個展が開催される(3/1-25)。グループ展は本文でも触れた「days——おだやかな日々」展(3/23まで)のほか「DOMANI・明日」(損保ジャパン 東郷青児美術館、3/2まで)に出品中。[撮影=森田ケン]

うもうひとつの寝台の上に喚びだす
 食器や枕や小屋や木と同じように、
 (ひかりの依り代)として描かれる。
 すっかりタイ料理にも馴じている
 はずの画家に、いつも絵として見せ
 られるのは、南国の花でも海でもな
 く、空っぽの皿や寝床に、閉ざされ
 た門ときて、こんどは寝釈迦なのか
 と水をむけると、「絵になるまで」
 は、(何事も)時間がかかるのです」
 と微笑みながら告げられた。

◎たかみ・あきこ「美術評論家」



Tree 1998
 キャンバスに油彩
 130×110cm
 ダイムラー・クライ
 スラー日本ホールデ
 イング蔵 写真提
 供=西村画廊